



受難の国 ハイチの歴史を知るために

村井友子

二〇一〇年一月二日、ハイチの首都ポルトープランスがマグニチュード七・〇の大地震に見舞われ、死者約二三十万人に及ぶ空前の大惨事となった。行政機関や社会基盤がもともと脆弱な西半球の最貧国ハイチの首都が大地震で壊滅的なダメージを受け、復興も国家再建も国際社会の支援なしでは不可能な状況に陥っている。これまでもハイチの人々は、貧困、デュバリエ父子による長期独裁政権期（一九五七〜八六年）の恐怖政治、その後も続く政情不安、度重なるハリケーンや洪水等に苦しみながら生きてきた。しかし歴史を振り返ると、同国は史上初めて奴隷解放革命を成功させ、他のラテンアメリカ・カリブ諸国に先駆けて独立し、黒人による共和国を設立する（一八〇四年）という

快挙を成し遂げた国である。本稿では、特異な国の成り立ちの歴史を持つハイチを知る手がかりとなる和書を数点紹介する。ハイチ共和国、通称ハイチ（アラ

ワク語で山の多い土地）はカリブ海の西インド諸島のイスパニョーラ島の西側に位置し、同じ島の東側三分の二を占めるドミニカ共和国とひとつの島を分け合っている。イスパニョーラ島という名称は、コロンブス一行が第一次航海で同島を訪れた際につけた名称であり、それ以前は「キスケージヤ」（アラワク語で大地の母）と呼ばれていた。石塚道子編『カリブ海世界』（世界思想社一九九二年）によると、この地域には主としてタイノ・アラワクと称される先住民が居住し、キャッサバ等を栽培しながら農耕生活を送っていたが、スペイン人到来後、鉱山等での強制労働、疾病、虐殺などにより、急速に減少していった。

く過程で、他の地域に先駆け、代替労働力としてのアフリカ人奴隷の導入が始まった。ハイチの前身は一四九二年のコロンブス到達後、スペイン領となったイスパニョーラ島のうち、一六九七年にライスワイク条約によりフランスに割譲されたフランス領植民地サンドマングである。浜忠雄『ハイチの栄光と苦難…世界初の黒人共和国の行方』（世界史の鏡 地域6（刀水書房 二〇〇七年））によると、サンドマングは、宗主国フランスが同地で砂糖黍やコーヒーなどの換金作物の大規模プランテーション経営に乗り出した結果、一八世紀後半には、世界で消費される砂糖の約四〇％、コーヒーの約六〇％を生産し、フランスの海外貿易の最大拠点となっていた。このプランテーション経営の生産を支える労働力として、奴隷貿易により当地に強制連行されてきたアフリカ人奴隷が現在のハイチ人の祖先である。一八世紀後半、サンドマングのアフリカ人奴隷とその子孫の人口は四〇万人以上に達していた。

の中でとらえた名著である。砂糖の消費と生産の拡大に伴い、ヨーロッパ人のプランター、銀行家、奴隷商、海運業者などが利権を拡大していく一方で、プランテーションを支えた黒人奴隷達は搾取され虐げられる立場にあった。カリブが生んだ最大の思想家のひとりであり、黒人解放運動の活動家でもあったCLR.ジェームズの著作の邦訳『ブラック・ジャコバン…トウサン・ルヴェルチュールとハイチ革命』（大村書店一九九一年）は、アフリカ人奴隷の蜂起（一七九一年）から独立までの二二年間にわたるハイチ革命の攻防の歴史を綴った一冊である。ルヴェルチュールは、サンドマング農園の奴隷の子として生まれながら、その才気と行動力により、革命戦争で卓越した指導力を発揮した人物である。彼はナポレオン軍によって捕らえられ、一八〇三年にフランスで獄死するが、デサリーヌら後継者が攻防の末にナポレオン軍の撃退を果たし、一八〇四年一月フランスからの独立を勝ち取った。

開していく中、フランス革命（一七八九年）後のフランスが、民主主義・基本的人権の尊重・所有権の確立など近代市民社会の基本原則を謳った人権宣言を掲げる一方で、奴隷解放と植民地支配の継続という両立しない二つの命題を抱えて迷走する経緯が明らかにされている。同書の本題はハイチ革命史研究であるが、独立後、共和国建設を目指したハイチで強権的な政権が続いた理由、同国が国際社会から孤立していった経緯、未だに主たる産業もなく貧困から脱却できない要因などについても触れている。同著者の「カリブからの問い…ハイチ革命と近代世界」（岩波書店二〇〇三年）の一読もお勧めする。残念ながら、現代のハイチに関する国内での纏まった研究成果は少ない。最後に、一九八八年からハイチの取材を重ねてきたフォトジャーナリスト佐藤文則の写真集『ハイチ：圧制を抜き抜く人びと』（岩波フォトドキュメンタリー世界の戦場から）（岩波書店二〇〇三年）を紹介する。現代のハイチで、圧制と貧困の中で生き抜く人びとの姿を伝える貴重な資料である。（むらい）

ともこ／図書館資料企画課